『地域の未来・自伐林業で定住化を図る ―技術、経営、継承、仕事術を学ぶ旅』

佐藤宣子 著

企画広報室長　植村　悌明

『地域の未来・自伐林業で定住化を図る　―技術、経営、継承、仕事術を学ぶ旅』
著者／佐藤宣子
出版年／2020年
発行所／一般社団法人全国林業改良普及協会

2020年農林業センサス結果（概数値）によると、林業経営体は３万４千経営体と５年前に比べ５万３千経営体（61.2%）も減少しました。林業経営体数の減少は必ずしも林業の衰退を意味するわけではありませんが、山の所有者と山との関わり合いが薄れてきていることは事実でしょう。

一方、新たな動きも見られます。それが本書で紹介している「自伐林業」です。

本書は、林業専門月刊誌の「現代林業」に2016年９月号から2019年12月号まで、40回にわたって連載した「自伐林業」探求の旅シリーズを書籍化したものです。

著者は３年以上にわたる自伐の旅を「集落に１人ずつでも自伐（型）林業者が存在するようになると、日本の農山村はもっと豊かに、もっと楽しくなる、と私自身、旅を通じて確信しました。」と振り返っています。

本書で印象に残った言葉をいくつか抜き出してみます。

「自伐林家」という言葉が使われるが、伐るだけの林業に聞こえる。親方たちが植えてくれた、木を守り、恩返ししたい。自伐ではなく山の管理をしている。家族中心の経営の良さを評価してほしい。（30～40代　自伐林家後継者）

地域の山をゾーニングして、誰もが施業できるようにする必要があり、持続可能な森林管理や安定的な材の供給、雇用の確保に繋がる林業スタイルを作ろうと取り組んでいる。（40代　林業経営者）

林業は適切な間伐をすることで収入が得られ、将来の資産になり、環境保全ができて減災に繋がり、生物多様性ができる。それだけの付加価値が付けられる仕事は他にない。収入以上の付加価値がつく。自伐林業のやりがいです。特に子供を持って、地域のためにという思いが強くなった。（40代　自伐林家）

今後彼ら（Iターン自伐林家）が施業を請け負った山は、１つ１つが彼らの看板になっていくのだから、たとえ赤字になっても、それは勉強代だと思って良い山にする。そうすれば必ず反響がある。（森林所有者）

海外を旅して思ったのは、世界で通用するのは百姓や職人といった手に職がある人で、そういう人たちが地域に根付いた暮らしをしているところだから、海外からも人が訪れるんじゃないかと。自分が生まれ育った場所、価値の高さに気付いた。（30代　Uターンで地元の祭り（ヘボ（蜂の子）祭り）を継承した自伐林家）

本来の山を守ろう、地域を元気にしようというやり方の１つが自伐型林業で、それをフォローしていくのが森林組合の力（50代　森林組合参事）

森林組合はどのくらいの材積を伐出できるかが明確。大谷君（自伐林家）は山を将来的にどうしたいかが明確。返ってくる金額の多寡は問題ではなく、将来的にいい山にしてくれる彼に任せた（森林所有者）

機械化された林業では、オペレーター１人しか働き手はいらない。それを10名が副業でやれば10人が町で暮らせる。その10人はその土地から離れないから地域の担い手になる（30代　役場職員）

まだまだ紹介しきれませんが、登場する方たちは、自らの（暮らしている）村、地域を少しでも良くしていこうという思いであふれています。一言で表すなら共生への思いではないでしょうか。

過去、現在そして未来との共生。植林をしてくれた祖父世代、親世代への感謝。山を良くすることへの思い。それが地域につながることの楽しみ。未来の村、地域を、将来の世代、子供たちにいかに引き継いでいくのか・・・。

自伐林業は地域が元気になります。ただし簡単ではありません。いろんな方々の助けが必要です。本書は自伐林業を通じた村おこしの本ともいえると思いますが、その中身はこの短いブックレビューでは紹介しきれません。当研究所でも地域の観点から取り組みたいテーマですし、地域を良くしたいと考えている中山間地域の関係者の方々には、ぜひ読んでいただきたい一冊です。